筑波学院大学紀要第８集　113 ～ 122 ページ　　2013年

＜研究ノート＞

宮坂哲文の父と禅：宮坂喆宗小論

根津　朋実*

Tetsufumi, MIYASAKA's Father and Zen: a Note on Tesshu, MIYASAKA

NETSU Tomomi*

はじめに

宮坂哲文（みやさか てつふみ 1918-1965）は、戦後の生活指導や教科外活動の研究により知られる。本稿[1]は、教科外活動に関する彼の研究の再評価にあたり、彼と禅との関係を解明する目的をもつ。その起点として本稿は、彼の禅への見解に影響を与えた父、宮坂喆宗（みやさか てっしゅう 1887-1973）[2]の履歴や文献を整理し、基礎資料を提供する。以下、適宜姓「宮坂」を略し、それぞれ「哲文」「喆宗」と記す。

戦後、なぜ哲文はアメリカ合衆国の extra-curricular activities を学び、「特別教育活動」（哲文 1950）を研究したのか。ひとつの解は、僧が集団で生活する禅林への関心にある。哲文は、碩水寺（せきすいじ 長野県東筑摩郡坂北村（現 筑北村）曹洞宗）の住職喆宗の長男で（坂本 1990：227-229）、東京帝国大学の卒業論文（1941 年）を『禅林に於ける教育形態の研究』と題した（哲文 1948=1970：219-220）。この卒業論文は、戦後、著書『禅における人間形成』（哲文 1947）の一部を成した（哲文 1948=1970：220）。

前述の諸事実に即せば、禅を手がかりに戦後の教科外活動の系譜を読み解く、という接近法を提起できよう[3]。ひいては、戦前と戦後との教科外活動を連続的に理解し、禅と国民学校期「錬成」との関わり（清水 1987：349）、その継承や断絶をも検討できる。より今日的には、禅を経由して教科外活動をみる立場を、改めて提示できる。しばしば当然視される学級による集団生活、食事、清掃は、それぞれ禅林（禅堂教育）（小野 1987a，荒川 1993 等）、喫茶喫飯（小野 1987b）、作務（荒川 1989 等）に、対応すると目される。年齢による上下関係や体罰も、禅林の集団生活（たとえば Hori 2006）と対比できよう。

教科外活動に関する哲文の研究と禅との関係を考察する際、父喆宗への注目は不可避である。哲文は『禅における人間形成』の序文で、次のとおり喆宗の影響を認めた。すなわち、「殊に明年還暦を迎へる父の日常の示教によ

＊　経営情報学部経営情報学科　非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

つて本書に示された如き問題領域への私の関心が育まれてきたことを想ひ、ここのさゝやかな労作が報恩の一端ともなれば私の幸、これに如くものはない」（哲文 1947：序 4 下線は引用者）、と。後年、哲文は病床でも、「坂北父の自叙伝を書いて貰って、自費出版でもいいから活字にしておきたいとこのごろしきりに思う。（中略）歴史的にも興味深いことが多いはず」（1964 年 12 月 23 日付）（哲文 1965：73）と、坂北村碩水寺の父、喆宗の歩みに関心を寄せていた。

そこで本稿は、次の課題および方法を設定する。まず、喆宗の略歴、文献を整理する。喆宗を主題とした論考は未見で、文献の概況も不明である。この状況に対し、本稿は基本情報を提供する。史料として、堀口編（1931）、岩浅他（1965）[4]、『生活指導』73（「宮坂哲文追悼」）（1965）、および東筑摩郡松本市・塩尻市郷土資料編纂会編（1982）を主に用いる。次に、喆宗による文献をもとに、彼と禅との関係を指摘する。以上の検討にもとづき、禅に関し喆宗が哲文に与えた影響を述べ、結論とする。

先行研究として、禅と哲文の研究との関わりを扱った坂本（1990）や小池（2008）、北村（2011）がある。他方、哲文の生活指導論や生活綴方論を扱った研究は、この論点を看過するか（村上 1989）、補足的に扱う（鈴木 1989：124-125，山岸 1996：32-33）。多くの研究は戦後の文献、とくに『禅における人間形成』の検討が主で、同書以前の哲文の諸論考（哲文 1944 等）を参照しない[5]。例外は清水（1987, 1993）や山本（2011:361）だが、喆宗への詳述を欠く。

喆宗から哲文への影響は、以前から、「禅宗の徳・学ともに高い父君喆宗氏の御薫陶のもとに育ち、禅的人間形成の究明が、宮坂哲文氏の学究としての出発点でした」（城丸 1965：6）、「宮坂の禅林教育史への関心は、父宮坂喆宗によって育くまれてきたものである」（竹内 1975：303）等と言及されてきた。これらの言及を裏付ける検討は未見である。こと喆宗については、哲文と切り離した断片的な叙述しかない（前田 1987 等）。成蹊学園の創立者、中村春二を扱った小室（2005：31）に喆宗の名があるものの、禅や哲文との関係は明言がない。喆宗と成蹊実務学校との関わりを「成城学園」とし、もって哲文の論と進歩主義の教育思想との結びつきを示唆する説（北村 2011：7 傍点は引用者による）もある。

そもそも喆宗の人物像すら未詳である。駒沢大学で副学長相当の「学監」を喆宗は務めた（駒沢大学百年史編纂委員会編 1983b：2004-2005）が、史料不足で不明な点も多い（同 1983a：401-403，449，453）、とされる。

１．宮坂喆宗の略歴および文献

諸史料にもとづき、表１に喆宗の略歴をまとめた。

表１　宮坂喆宗（1887-1973）の略歴

年	満年齢	記　事
1887（明治 20）	0	・4 月、出生。東筑摩郡本城村吉田充夫の長男として生まれ、事情により母方の姓宮坂を名乗る
－	－	・坂北村碩水寺（曹洞宗）の徒弟となる
1907（明治 40）	20	・松本中学校卒業（第 28 回生）、「自治精神」に触れる
－	－	・第三高等学校（京都）を経て（「京都大学教授たりし工学博士青柳栄司」（『魂の道場』：167）を恩師と称する）、東京帝国大学へ進む

1913（大正 2）	26	・東京帝国大学哲学科（宗教学専攻）卒業 ・引き続き 3 年間、曹洞宗の宗門内地研究生となる
1916（大正 5）頃	29	・高楠順次郎の依嘱により、『織田仏教大辞典』の補修整理に加わる（晩夏以降に校了、1917（大正 6）年刊）
1917（大正 6）	30	・4 月、先約により、池袋成蹊学園実務部主事（成蹊実務学校長）に就任（友人（宮本覚純）の関係で、創設者中村春二を知っていた） ・同郷の小学校教員（県立女子師範卒）三溝（さみぞ）ふみ江（婦み江）と結婚 ・音羽の護国寺裏大塚坂下町（小石川区）に居住 ・12 月、成蹊学園断食修養会を開催（12/25-27）
1918（大正 7）	31	・1 月、福島で講演（1/27、『新教育』4（10）所収）、成蹊学園により秋田県角間川町浄蓮寺で断食修養会（秋田県教育会主催）開催（1/29-31） ・長男哲文、5 月出生、命名は両親の名から 1 字ずつとる ・7 月、著書『断食と修養』、成蹊学園より刊行される（中村春二の序、および中村、後藤松之助、喆宗の写真有）
1919（大正 8）	32	・講演「修養の一方法としての断食」 ・7 月、碩水寺の本師急逝、筆頭弟子ゆえ、成蹊学園を辞し、秋、一家で郷里へ戻る
1920（大正 9）	33	・秋から翌年春にかけて、住職就任、先師法要等の諸行事に忙殺される
1921（大正 10）	34	・4 月、碩水寺内に修道会を設ける（月 1 回開催） ・秋、「南信伊那の山中」を連日巡回する
1922（大正 11）	35	・県立松本女子師範学校嘱託、修身教授を担当（同年 3 月に辞任） ・2 月、宗門から教学部主事に任命され、上京、芝区の宗務院に勤務、両山巡教の事務に携わる ・冬、哲文の眼の治療もあり、碩水寺を委託し一家（妻、子 3 人、親戚の子守）上京、芝公園の寺院の一室に寓居する ・この年度、地方臨時講習会による巡廻布教のため、関西、九州に赴く
1923（大正 12）	36	・哲文の治療に海岸が良いと医師が勧め、鶴見区潮田（生麦）に借家 ・8 月 盆行事で長野へ帰郷 ・8/30 上京、当時の教学部長大森禅戒（駒沢大学学監・学長を経て部長）、病気を理由に辞表提出 ・8/31 山梨県に大森を訪ね辞表撤回を懇請するも医師の勧告と判明、9/1 帰京と決す。9/1 上京予定で早昼中、関東大震災に遭遇。9/4 中央線を逆行、蕨駅経由、夜間野宿。9/5 東京着、芝宗務院、鶴見総持寺を経て、潮田着 ・年末、哲文の眼病治癒、一家は年末に長野へ帰郷、喆宗は東京に滞在
1924（大正 13）	37	・2 月、成蹊学園長中村春二逝去、密葬・本葬に随従 ・4 月、中村春二の四十九日法要を終え、宗務院を辞任し、郷里に帰る ・6 月、信濃教育会第 39 回総集会で「仏教ヨリ観タル教化」と題し講演 ・8 月、夏期修道会に加え、毎月第 2 土・日曜に碩水寺で恒例修道会を開催 ・松本女子師範の嘱託に再任（修身および心理を担当）
1925（大正 14）	38	・5 月、宗門の同胞慰問使としてハワイ・北米に赴く、併せて県から社会事業視察を嘱託される（「方面委員郡会長」だった関係による） ・11/9-19 ロサンゼルスに滞在、年末に帰国
1926（大正 15）	39	・11 月、ラジオ放送で講演「日日是好日」を行う
–	–	・喆宗が教えた女子師範の卒業生（古田某）、坂北村尋常小学校の初年級で哲文を受け持つ
1928（昭和 3）	41	・5 月、「満鮮巡回」に出発、6-7 月「全鮮各道五旬の巡廻」、「金剛探勝」、「京城見学」を経て、奉天行きの汽車でハルピンへ向う、8 月帰郷 ・12 月、市立松本女子職業学校（1940（昭和 15）年から県立松本高等家政女学校）より依嘱を受け、以後毎年 12/8（1942（昭和 17）から 2/8 へ変更）に、お針供養を行う

1931（昭和 6）	44	・哲文の松本中学校在学中（1931-1936）、同校で講演 ・この年、曹洞宗宗会議員（公選 52 名の 1）、曹洞宗制度調査会委員（総持寺系 3 名の 1）、との記録有
1934（昭和 9）	47	・「村塾運動」の一環として、長野県諏訪郡永明村頼岳寺の鵞湖村塾にて、講師を務める（1935（昭和 10）年の記録有）
1936（昭和 11）	49	・哲文、4 月、松本高等学校文科乙類に入学
1937（昭和 12）	50	・4 月、曹洞宗会議長の記録有 ・5 月、大森禅戒、駒沢大学学長を辞任、留任運動起る ・5 月、宗務院教学部の決定により、駒沢大学学監として採用され、上京、赴任（前学監の立花俊道が学長となる） ・7 月、支那事変（盧溝橋事件）勃発、戦死病没者の本葬のため頻繁に帰郷
1938（昭和 13）	51	・2 月、国民精神総動員昂揚運動に伴い、宗門より、関西四国の 8 府県へ特別布教派遣布教師として赴くよう命ぜられる（2/20-3/4）
1939（昭和 14）	52	・哲文、3 月松本高等学校卒業、4 月東京帝国大学文学部教育学科入学 ・8 月時点で、駒沢大学学内団体、新聞部を担当
1940（昭和 15）	53	・10 月、大森禅戒が宗門管長となり、喆宗が同内局の教学部長に任命されたことから、駒沢大学学監を辞任し、宗務院に転出する ・この頃、東京本郷駒本小学校の実践に携わる ・年末、宗制面の混乱に伴い内局総辞職、郷里へ戻る
1941（昭和 16）	54	・1 月下旬、修道会運動や翼賛会支部協力会関係の任務有 ・7 月、著書『魂の道場』、同文書院より刊行 ・9 月、岐阜県庁員の錬成講習（於関町龍泰寺）に列す ・12 月、哲文の大学卒業式に参列
1943（昭和 18）	56	・著書『断食と節量食』、鴻盟社より刊行（『断食と修養』を改訂増補） ・この年まで県立松本高等家政女学校で「お針供養」が継続された記録有
1944（昭和 19）	57	・10 月、藍綬褒章を下賜される ・坂北実科中等学校、青年学校に変更となる
1945（昭和 20）	58	・4 月、坂北村青年学校の独立式が挙行される
–	–	・郷里で「司法観察保護司（ママ、「司法保護委員」か）、教誨師」を務め、坂北村青年学校で教えた（戦前の職名と推察されるため、ここに記す）
1946（昭和 21）	59	・11 月、連合国軍の指導により、碩水寺を含め戦死者の村葬が中止となる
1947（昭和 22）	60	・3 月、哲文『禅における人間形成』、初版刊行
1948（昭和 23）	61	・以後 2 年間、警察関連組織（警察義会、公安委員会）の雑誌『旭の友』（別名『あさひのとも』）に数度寄稿
1949（昭和 24）	62	・4 月、坂北村で公民館発足、初代館長に就任
1952（昭和 27）	65	・公民館長を辞任、坂北村の教育委員に就任
1954（昭和 29）	67	・教育委員を辞任 ・『織田仏教大辞典』再刊、補訂は喆宗による
1959（昭和 34）	72	・1 月、哲文宅で、滑川道夫および中内敏夫による聴き取り調査に協力
1965（昭和 40）	78	・1 月、哲文没（享年 46） ・2 月、『宮坂哲文教授追悼録』刊行 ・5 月、『生活指導』73 に哲文に関する記事を寄稿
1970（昭和 45）	83	・この頃までに病を得、床に伏す ・3 月、哲文の『禅における人間形成』再刊（喆宗の諸準備にもとづく）
1973（昭和 48）	86	・8 月、歿

注：地名、団体名等の記載は、明らかな誤記を除き、史料のママとした。

また、確認できた史料類の一覧を表２に示す。記載事項は表１と一部重なる。表２中の文献等は、以下、（表２の文献 No.：ページ）等と略記する。

表２　宮坂喆宗に関連する文献等一覧

No.	刊行年月	執筆者、標題	掲載誌等	備考
1	1917（大正 6）=1954（昭和 29）=1980（昭和 55）	織田得能『織田仏教大辞典』（芳賀矢一、高楠順次郎、南條文雄、上田萬年（監修）、大仏衛、和田徹城、宮坂喆宗（補修））	大蔵出版株式会社	1954 年再刊、1980 年新訂 5 刷（補訂縮刷版）
2	1918（大正 7）.7	『断食と修養』	成蹊学園	中村春二の序、中村らとの写真有
3	1918（大正 7）.10	「静慮と内観」	『新教育』4（10），1-9	成蹊学園史料館蔵
4	1920（大正 9）.11	「修養の一方法としての断食」	『明治聖徳記念学会紀要』14，145-160	1919 年の講演を採録
5	1926（大正 15）.4	「真実なる慈悲の心」	『日本公論』14（4），17-21	数カ所を削除し、のち No.27 に再録
6	1928（昭和 3）1，2，6-12	連載「教化の問題」	『禅の生活』（青山書院）7（1），52-55，（2），55-59，（6），74-77，（7），75-77，8），41-43，（9），74-77，（10），63-66，（11），65-69，（12），80-83	7（7）「朝鮮巡回途上平壌大照寺にて」、（8）「奉天行汽車中」、（9）囲み記事に修道会への言及有、（11）『信濃毎日新聞』の修道会参加者の感想を転載
7	1928（昭和 3）.3	「教化者の理想的典型」	『禅の生活』7（3），56-59	新井石禅の追悼記事、1925 年夏のハワイ巡回に言及
8	1928（昭和 3）.11	「日日是好日」	日本放送協会関東支部編『ラヂオ講演　通俗仏教講座　第一巻』北隆館，32-42	肖像有、1926 年 11 月 21 日の講演を採録、国立国会図書館蔵
9	1930（昭和 5）.12	「同情習慣に就て」	高島隆基編『曹洞宗布教叢書　第 10 巻』曹洞宗布教叢書刊行会，　109-130	「通俗講話」中の一編、方面委員への言及有、1925 年の対米経験に拠るか
10	1931（昭和 6）.9	「米国社会事業資金募集運動と我が社会事業の実情に就いて」	『社会事業』15（6），14-35	1925 年 11 月の渡米にふれる
11	1931（昭和 6）.12	（無署名）「曹洞宗宗会議員」「教化団体」「曹洞宗制度調査会」「現代著名仏教者」	堀口義一編纂『仏教年鑑』，79，　187，　249-250，　418	記事「現代著名仏教者」中に、喆宗の項有
12	1933（昭和 8）.2-7	連載「宗教より見たる断食」	『禅の生活』12（2），　42-45，（3），　64-73，（4），38-43，（5），　32-37，（6），　66-71，（7），　72-77	12（3），73 に「恩師高楠博士」への言及有、高楠順次郎と目される
13	1934（昭和 9）.12	新聞記事「満洲国の教線拡張は積極的に行へ」	『中外日報』12.18 付	曹洞宗会の質疑を掲載
14	1937（昭和 12）.5	「祝辞」	『跳龍』（総持寺三松会発行）9（5），24	肩書「曹洞宗会議長　宮坂喆宗　老師」
15	1938（昭和 13）.3	「宗乗研究の重要性」	『駒沢大学実践宗乗研究会年報』6，14	学監在職時
16	1938（昭和 13）.1-7	連載「禅と教化」	『禅の生活』17（1）,30-33,（2），26-29,（3）,40-43,（4）,31-35,（5），14-17，（6），6-9，（7），26-29	

17	1939（昭和 14）.7	「行と生活態度」	『大法輪』6（7），6-19	肩書「駒沢大学学監」
18	1939（昭和 14）.11	（無署名）「特別布教」	蔵山光瑞（曹洞宗教学部長、曹洞宗興亜局）編『支那事変と曹洞宗』日本書店，23-25	特別布教派遣布教師 10 名の 1、http：//kindai.da.ndl.go.jp/info：ndljp/pid/1096227
19	1939（昭和 14）.12	「赤羽先生を憶ふ」	『信濃教育』638，73-74	赤羽寿平治追悼文
20	1940（昭和 15）.4	「学校に於ける行教育」	『大法輪』7（4），40-51	肩書「駒沢大学学監」
21	1941（昭和 16）.7	『魂の道場』	同文書院	
22	1942（昭和 17）.2	「行的錬成の契機」	『台湾仏教』20（2），2-9	台湾総督府文教局社会課内台湾仏教会発行
23	1943（昭和 18）.5	「『お針供養』の理念」	『信濃教育』679，5-16	「市立松本女子職業学校」への言及有
24	1943（昭和 18）.9	『断食より節量食へ』	鴻盟社	No.2 を改訂増補、県立長野図書館蔵（喆宗寄贈）
25	1946（昭和 21）.10	「お針供養」（其の二）	『狗仏』（世田谷区福昌寺内、狗仏会）7，1-3	プランゲ文庫、No.23 の抄録
26	1948（昭和 23）.10	特別寄稿「知見と修習」	『旭の友』（長野県警察義会）27，7-8	プランゲ文庫
27	1949（昭和 24）.3	特別寄稿「歓喜の生活」	『旭の友』（長野県公安委員会協議会）32，5-7	プランゲ文庫、肩書「元駒沢大学々監」、No.5 の抜粋
28	1949（昭和 24）.6	特別寄稿「坐禅」	『旭の友』（長野県公安委員会協議会）35，13	プランゲ文庫、誌名は奥付による（表紙「あさひのとも」）、肩書「元駒沢大学々監」
29	1950（昭和 25）.3	特別寄稿「青年自殺の問題」	『旭の友』（長野県公安委員会協議会）44，16	プランゲ文庫、誌名は奥付による（表紙「あさひのとも」）
30	1960（昭和 35）.3	（付記「文責　滑川，中内」）「宮坂喆宗氏に聴く」	『成蹊学園教育研究所所報』3，135-138	付記「於官（ママ）坂哲文氏宅，昭和 34 年（ママ）1 月 21 日」
31	1965（昭和 40）.2	「長男哲文の想い出」	岩浅他『宮坂哲文教授追悼録』2-3	ふみ江「長男を失いて」、3-4 へ続く
32	1965（昭和 40）.5	「少年時代の哲文の思い出」	『生活指導』73，63-68	著者名に付記「父」
33	1967（昭和 42）.10	宮坂喆宗、小林さと子（共編）「序文」、「座談会」	『古村青山翁追悼録』1-3，168-172	県立長野図書館蔵
34	1981（昭和 56）.2	黒沢清「成蹊の想い出」	桃蔭会編『成蹊実務学校教育の想い出』，126-142	137-138 に喆宗への言及有
35	1981（昭和 56）.2	川瀬一馬「宮坂喆宗先生」	桃蔭会編『成蹊実務学校教育の想い出』，507-510	幼少時の哲文の挿話有
36	1982（昭和 57）.2	「宮坂喆宗」	東筑摩郡松本市・塩尻市郷土資料編纂会編『東筑摩郡松本市・塩尻市誌　別篇人名』，440-441	続けて「宮坂哲文」の項あり（441-442）
37	1997（平成 9）.3	「宮坂喆宗」	坂北村村誌編纂会編『村誌さかきた』下巻，593	次ページ（594）に「宮坂哲文」の項あり

注：執筆者が宮坂喆宗のみの場合、「執筆者、標題」の名を略した。

他に、非売品の追悼録類に短文が数点あるが、割愛した。

表1、表2から、喆宗の履歴に関し、次の諸事項を指摘できる。

まず、喆宗は仏教、なかでも禅宗（曹洞宗）の僧として人生を歩んだ。彼は碩水寺の徒弟であり、大学で宗教学を専攻し、曹洞宗の内地研究生だった（No.32：63）。『織田仏教大辞典』の印刷段階では、補修者（大仏衛）の地方赴任により喆宗が加わった（No.1：10）。同書再刊の際、喆宗作成の正誤表が用いられた（同：2）。喆宗は友人宮本覚純を介し中村春二を知り、宮本と共に成蹊実務学校へ「僧籍関係者として入ることになった」（No.30：136）が、本師急逝に伴い碩水寺を継ぐため同校を離れた。碩水寺住職となった後、喆宗は郷里と東京とを往復し、海外にも赴いた。曹洞宗の教学部に勤務、同宗同胞慰問使（兼、県嘱託）として北米等を視察（No.7，9，10）、両本山布教師を歴任し、満洲や朝鮮へ巡教した（No.6，11）。彼は曹洞宗宗会議員（No.13）や制度調査会委員（No.11）、同宗会議長（No.14）も務めた。駒沢大学学監就任の経緯も、曹洞宗との密な関係を示す。国民精神総動員運動（No.18）や翼賛会支部協力会（No.21：序2）といった戦時体制への関与も、当時の曹洞宗内の役職や僧の立場と不可分だったと目される。

次に、喆宗は旧制中学、高校、および帝大で学んだ、高学歴者だった。後年、哲文も松本中学校や東京帝国大学で学んだ。ただし喆宗は第三高等学校（No.21：167）、哲文は松本高等学校と、高校は別だった。喆宗は大学で宗教学を専攻し（No.12）、成蹊実務学校の教え子は喆宗を「東大の印度哲学科を出られた」（No.35：507）と記した。喆宗は当時の知識人のひとりであり、様々な教師としての顔も有した。すなわち彼は、県立松本女子師範学校の嘱託、市立松本女子職業学校の「お針供養」への関与や、駒沢大学の学監（No.15）として、諸学校や関係者と交流した。青年学校にも関与したらしい（東筑摩郡松本市・塩尻市郷土資料編纂会編 1982）。喆宗は社会教育にも携わった。すなわち、碩水寺住職就任後の修道会、「村塾運動」（前田 1987：35-36）の他、翼賛会支部協力会に関与した。

如上の2点に加え、喆宗は、戦前に中央と地方とを往復した、「地方の篤志家」だった。彼は社会事業関係者として、次の活動を行った。すなわち、今の民生委員の前身とされる「方面委員」（谷沢 2006：79-88）を務め、その関係で海外を視察し（1925年）、アメリカ合衆国の社会事業資金募集に関し報告した（No.9，10）[6]。「司法観察保護司」（ママ）や教誨師としての記事もある（東筑摩郡松本市・塩尻市郷土資料編纂会編 1982）。1944年の藍綬褒章受章も、彼が「地方の篤志家」だった証だろう。同章は「教育衛生慈善防疫ノ事業、学校病院ノ建設（中略）ニ関シ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者又ハ公同ノ事務ニ勤勉シ労効顕著ナル者ニ賜フモノトス」（褒章条例、明治14年太政官布告第63号）[7] とされた。表1に示したとおり、喆宗は戦後に坂北村の初代公民館長や教育委員も務めた。喆宗が「地方の篤志家」たりえたのは、住職と諸機関の教師とを兼ねていたからだろう。

表1、表2には、次の課題が残る。まず、喆宗の三高から東京帝大時代の史料に乏しい。両校の志望動機や、当時の教員の影響等を含め、今後の解明が俟たれる。次に、戦後の史料が少ない。確認できた戦後の文献も、No.5と27、No.23と25のように、既刊原稿の再録が目立つ。個人史料や郷土史料へと範囲を拡げ、喆宗の歩みを捕捉する必要があろう。

2．喆宗の関連史料にみる禅

次に表2の史料を整理し、喆宗と禅との関わりを考察する。表2の史料は、おおよそ(a)喆宗による文献、(b) 他者による記事（例：No.34）、(c) 名簿類（例：No.11，18）、(d)

追悼録類（例：No.7，19，33）に大別できる。以下、もっとも重要な（a）を主に扱う。

喆宗が執筆した文献には、禅や仏教への強い関心がみられる。好例は仏教辞典の補修（No.1）であるし、書籍等（No.2，8，21，24）も関連する事項を扱った。成蹊学園発行のNo.2は1917年末から翌年1月の断食修養会の講話に、同学園の「凝念と称する修養法」を扱ったNo.3も同時期の福島での講演に、それぞれ依拠する。No.4はNo.2にもとづき、No.30もこの時期に関わる。以下のとおり喆宗は、宗教的、精神的な断食の意味を拡げ、個人の向上や人間の真の価値へとつながる「修行の一方便」として、断食を位置づけた。

兎に角断食は宗教的並に精神的に、我慾に基を置かぬ、粋潔な、世の為人の為に望む所有つて専心祈願する場合を指すのがその本旨である。併し自分が茲に論じようとする断食はこれを少しく推し広めて、真に個人の真面目な本性を向上せしめて、人間としての真の価値を見出さうとする修行の一方便として行ふものと見たいのである。

（No.2：7-8　下線は引用者）

No.2から20年以上を経て、著書『魂の道場』（No.21）が出版された。同書は次のとおり、「魂の錬成」を介して仏教と皇国との関連を主張した。すなわち、「仏教に於ては、釈尊が転迷開悟を第一義とした関係から魂の錬成に就ては、我が国に多大の貢献を与へたものである」（No.21：3）、「魂の錬成は凡ての基調を為すものである。心ばへを貴ぶ皇国の真精神を発現するより外に、国家興隆の途はない」（同：8）と。同書からほどなく、雑誌『禅の生活』への連載（No.6，12，16）をもとに、No.2を改訂増補した『断食より節量食へ』（No.24）が刊行された。同書は『魂の道場』の姉妹篇とされ、いわゆる皇国史観を説き、戦時下の食糧難の状況に対して「節量食」を提起した。

他の文献にも、禅や仏教への関心が示された。時局下で「行」を扱った論考（No.17，20，22）は、掲載誌も特徴的である。この系譜に、前述『禅の生活』への数度の連載も位置する。喆宗自身による学校行事への関与も注目される（No.23，25）。戦後、公安関係の雑誌では、「雑阿会（ママ、含）経」により「知見と修習」を説き（No.26）、「父母師長養育の恩」を「仏恩」の継承として「眼に見、耳に聞く所の凡ゆる恩義が仏の広大の慈悲に帰する」と記し（No.27：7）、「只管打坐」を説いた（No.28）。日本の社会事業に言及した文献も、自身の「行的方面の修養」「修道会組織」に論及した（No.10：33）。追悼録類でも、碩水寺の修道会（No.19：74，33：168）にふれた。哲文の追悼記事（No.31，32）中、No.32は、喆宗自身の略歴を述べつつ、父として記した哲文の「ライフ・ヒストリー」が含まれた。この記事は宮坂喆宗と哲文との関係を考察する際、必読の史料である。

おわりに

宮坂哲文の父喆宗は、曹洞宗の高僧、教師、そして地方の篤志家という諸相を有した。喆宗による文献は、折々の社会情勢を反映しつつ、禅や仏教への関心を示し続けた。一部で知られていた成蹊実務学校や駒沢大学との関わりも、その関心の例だった。哲文のいう「父の日常の示教」は、喆宗の履歴や文献にみられる、禅や仏教への関与を指すだろう。

一方、「ぼくが家業を継がないで、家を出ると云ったとき、ぼくを理解して味方になってくれたのは、オフクロだった」（岩浅他1965：26）と、哲文は教え子に語った。この言から、喆宗は家業継承を哲文に期待したが、哲文は承諾しなかった、という経緯が示唆される。

冒頭で示したとおり、哲文は禅や喆宗に関心を寄せ続けた。ただ、子哲文の禅への関心が父喆宗と同じだったとは、一概にいえない。本稿の検討から明らかなとおり、喆宗は禅僧として信仰とともに人生を歩んだ。一方、禅に深く根ざしつつも家業を継がず、周知のとおり教育学者の道を歩んだ哲文は、禅を信仰の対象のみならず、教育学の研究対象として扱おうとした、と考えられる。

紙幅の制約もあり、喆宗の影響を受けたと思しき戦後初期までの哲文の諸論考について、本稿では扱わなかった。今後の研究課題として記す。

注

1）本稿は、日本カリキュラム学会第23回大会の自由研究発表（於中部大学，2012年7月7日）の内容にもとづく。執筆に際し、科学研究費補助金（基盤研究（C），22531010）を用いた。旧字体は適宜新字体に改めた。URL類は、すべて2012年10月10日に確認した。また、「占領期メディアデータベース化 プロジェクト委員会」（代表・山本武利）作成「占領期新聞・雑誌記事情報データベース」を参照した。

2）生没年は東筑摩郡松本市・塩尻市郷土資料編纂会編（1982）による。号「見外」（堀口編1931：418）。「喆」は「哲」に同じく（諸橋1974：1016，　1083）、「哲」とも表記される。国立国会図書館サーチ（http：//iss.ndl.go.jp/）や20世紀占領期データベース（http：//m20thdb.jp/）の検索結果も、「哲宗」と表記する場合がある。「喆」を外字とし、「〓宗」（http：//ci.nii.ac.jp/）や「［テッ］宗」「［テツ］宗」等と表す場合もある。

3）教科外活動の諸概念「集団」「生活」「自由」等を戦後由来とする見方は、素朴に過ぎる。禅と学校教育との関係への言及は、多くはない。本文中で示した荒川元暉や小野慶太郎の諸論考、真流（1960等）や、主に戦前を扱った中内（2000）が注目される程度である。

4）岩浅他（1965）は、次の理由により、公刊物相当の史料とみなした。①刊行当時、購入希望者の申込みを受け付けた（『生活指導』73（1965：97））、②複数の大学図書館に所蔵がある（http：//ci.nii.ac.jp/books/）、③古書店を通じ入手できる。

5）『宮坂哲文著作集』（全3巻）は戦前の諸論考を採録せず、哲文（1947）も別途刊行の予定ありとして、採録しなかった（春田他1975：2）。哲文没後、喆宗や哲文の門下生（水内宏）により、哲文（同）は哲文（1948=1970）として新装再刊された。

6）僧、教師、社会事業関係者の兼任は、地方ゆえかもしれない。高学歴の僧が方面委員として社会事業に携わる例は、大都市圏では稀だった（谷沢2006：81-88）からである。

7）http：//law.e-gov.go.jp/htmldata/M14/M14SE063.html による。

文献（アルファベット順　原則、本文の表２で示した文献は除いた）

荒川元暉1989「作務による人間づくり」『禅と緑と健康：正眼短期大学論集』2，10-22

荒川元暉1993「禅林学校の教育理念」『日本仏教教育学研究』1，100-104

春田正治，城丸章夫，竹内常一1975（初版1968）「まえがき」『宮坂哲文著作集I』明治図書，1-2

東筑摩郡松本市・塩尻市郷土資料編纂会編1982『東筑摩郡松本市・塩尻市誌　別篇　人名』，440-441

Hiraoka，S. 2011"The Ideology and Practices of 'Seikatsu-Tsuzurikata'：Education by Teaching of Expressive Writing"，*Educational Studies in Japan：International Yearbook*，6，21-31.

Hori，G.V.S. 2006（c1998）"Teaching and learning in the Rinzai Zen monastery"，in Rohlen，T. and Letendre，G.（eds.），*Teaching and Learning in Japan*，Cambridge University Press，20-49.

堀口義一編1931『昭和七年　仏教年鑑』仏教年鑑社

岩浅農也，竹内常一，藤田昌士，前之園幸一郎編1965『宮坂哲文教授追悼録』（奥付無）

北村三子2011「禅と教育学」『駒沢大学教育学研究論集』27，5-22

小池孝範2008『道元の禅思想における人間形成の研究』（東北大学博士論文　http：//ir.library.tohoku.ac.jp/re/bitstream/10097/34789/1/Koike-Takanori-02-08-0060.pdf）

駒沢大学百年史編纂委員会編『駒沢大学百年史』1983a（上巻），b（下巻）駒沢大学年史編纂委員会
小室弘毅 2005「中村春二の教育思想と凝念法」『研究室紀要』（東京大学大学院教育学研究科教育学研究室）31，23-33
前田一男 1987「長野県にみる錬成体制の構築」寺崎昌男，戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育』東京大学出版会，　34-54
真流堅一 1960「禅問答の教育的一面」『熊本大学教育学部紀要』8，　33-43
宮坂哲文 1944「大東亜戦争と教育改革」『日本教育』3（9），41-44
宮坂哲文 1947『禅における人間形成』（初版）霞ヶ関書房
宮坂哲文 1948『禅における人間形成』（第２版）霞ヶ関書房 =1970 新装再刊，　評論社
宮坂哲文 1950『特別教育活動』明治図書
宮坂哲文 1965「宮坂哲文氏病中日記」『生活指導』73，69-73
村上純一 1989「宮坂哲文の生活指導論と生活綴方論」『教育科学研究』（東京都立大学）8，49-58
諸橋轍次 1974（初版 1956）『大漢和辞典』（縮写版巻二）大修館書店
中内敏夫 2000「戦時国家による総括」『中内敏夫著作集 VII』藤原書店，177-220
小野慶太郎 1987a「禅堂教育の遺産とその現代的意義について」『筑波大学教育学系論集』11（2），29-40
小野慶太郎 1987b「禅堂教育の遺産とその現代的意義（その 2）」『筑波大学教育学系論集』12（1），23-33
坂本信昭 1990「宮坂哲文 禅と教育を論究して」皆川廣義編『曹洞宗教義法話大系 第二十五巻 現代と曹洞宗 II』同朋舎出版，227-234
清水康幸 1987「錬成の歴史的位置」寺崎昌男，戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育』東京大学出版会，339-351
清水康幸 1993「修養運動と教育」寺崎昌男・編集委員会共編『近代日本における知の配分と国民統合』第一法規，389-408
信濃教育会編著 1977『信濃教育会九十年史　上』（『信濃教育会五十年史』覆刻版）信濃教育会
城丸章夫 1965「主張　全生研運動の意義と宮坂哲文」『生活指導』73，5-11
鈴木庸裕 1989「生活指導における教師と子どもの教育的関係について」『大阪音楽大学研究紀要』28，119-133
竹内常一 1975（初版 1968）「解説」『宮坂哲文著作集 I』明治図書，290-303
山岸知幸 1996「宮坂哲文の生活指導理論における『学級』概念の検討」『教育方法学研究』（日本教育方法学会）21，29-37
山本敏子 2011「日本諸学振興委員会教育学会と教育学の再編」駒込武，川村肇，奈須恵子 編『戦時下学問の統制と動員』東京大学出版会，303-374
谷沢弘毅 2006「方面委員から民生委員へ」『札幌学院商経論集』23（1），47-124

『東京大学教育学部紀要』3，1959

（2012.10.16）